



# Book Talk

編集・発行 海南高校図書館  
第19号 2013.12.13

## 「つんどくよりよんどくだ!」というお話

読書量は多いわけではないけど、やたら何か「活字」を読んでいる。選び方は、「見た目」や「はじまり」からの時もある。

『ノックの音が』(星新一)は、表紙に魅かれて開いてみたのだが、いつの間にか最後まで読み切ってしまった。

ノックの音が  
星新一



「ノックの音がした。ここはちょっと高級なアパートの中。内部は和室と洋室、そしてダイニング・キッチンと浴室からなっている。…」

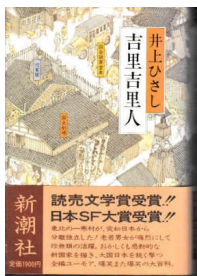
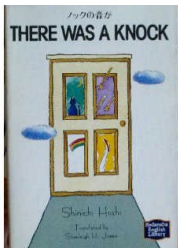
シンプルだけどちょっとミステリアスなことばの流れに引き込まれる。

その後、英語版が出てたのでこれも面白半分て読んでみた。

「There was a knock. The place was the interior of a moderately high-class apartment, made up of a Japanese-style room,…」

英語もいい雰囲気だった。

本の中身は日本語だったり英語だったりするが、「とりあえず読んどくがいつの間にか乱読」ってことになる。それでも「求めよ、さらば与えられん!」という気持ちが大切だ。出会いはいろんなところにある。手にするきっかけは、新聞広告だったり、人から薦めてもらったり、国語や英語の教科書中の作品だったり、この頃は「本屋大賞」なども情報源にしている。乱読なので、手にとって読みかけた相手と相性がいい時も、悪い時もある。「こりゃついていけない。」と思ったらやめる。気にしなくていいのが読書のいいところ。今も家にひっそりと置かれてある『吉里吉里人』(井上ひさし)は、実は読みかけて十数年経つが未だ完結できていない。始まりはいいのだけど。



「きりきりづんはまんごはアすんずかではんなすづとこんごろはアまつぐでおとげえとこんごろぎすはアかんだくて…」

それに僕の場合、時々読んだことを忘れてしまっていることがある。これが不思議といい効果をあげていて「あれっ、読んだことあるかも。」と思いつつ、これまた最後まで読み切ってしまう。すべてを思い出した後でも、以前読んだときとは一味も二味も違う感想や感動や感激があるのが素晴らしい。こんなにピーターもいいことだと思う。

本との出会いは作者との出逢いであるけれど、作者とともに人物や事件や思いを時空を超えて体験する冒険なのかもしれない。ちょっと臆病な自分でも触れることのできる別世界だ。『精霊の守人』(上橋菜穂子)のシリーズを読んで、登場人物"バルサ"(主人公の女用心棒。短槍の達人)に思い入れ、恋慕しながら少年のように冒険に夢中になったりもした。大人げないけど自由奔放な世界への憧れもあるのかな。



たとえば、『神去なあなあ日常』(三浦しをん)を開くと、

「彼らの口癖は『なあなあ』で、これはだれかに呼びかけているものでも、なあなあで済ませようと言ってのものでもない。『ゆっくり行こう』『まあ落ち着け』ってニュアンスだ。」

あっという間に僕はその物語の村にいて、どこかの風景や人々の暮らしに思いを巡らせている。読書は旅行に似ているな。「活字の旅」の途中で福岡伸一も終わった後でも、新しい力が湧いてくる。現実の世の中でも頑張ってみようかなと決意を新たにす。自分は感化されやすいタイプなので、近頃になってハッと思われ、いつまでも心に引っかかっているのは、『センス・オブ・ワンダーを探して』(福岡伸一・阿川佐和子)の「半年から一年も経てば私たちは分子のレベルでは全く別人になってしまう。だから、久しぶりならお変わりありまくり。」とか『日本辺境論』(内田樹)の「私たちは変化する。けれども、変化の仕方は変化しない。」という言葉たちだ。さらには「コラーゲン、あるいはそれを低分子化したものをいくら摂っても、それは体内のコラーゲンを補給することにはなりえないのである。」と『動的平衡』(福岡伸一)を読んでいると、



自分の感じ方だけでなく生き方までダイナミックにしてくれる力がある。『船を編む』(三浦しをん)には人生の不思議があり、『天地明察』(沖方丁)の中をさまよえば想像以上の壮大なドラマがあっ

て、飽くことのない流れが歴史上の人物の虚実を含めてビシバシ心に響いてくる。『海賊と呼ばれた男』(百田尚樹)の世界では、今まで知らずに興味も持たなかった史実を見つけ、自分のちっぽけさに驚くこともしばしばだ。それでも気にせず、興味のままだに相変わらず乱読の波間に飛び込んでいる。そして、たまに、誰か他の人が自分と同じ本を読んでいて、ちょっとした瞬間にその人と話題が噛み合ったりすると、それはまた別の楽しみ方なんだなと感心する。読書って面白い。本の扉を閉じたとき「よっしゃ、明日も頑張ろう。」って思う。そんな読み方を続けたいな。もちろん「なあなあ」でね。



『船を編む』(三浦しをん)には人生の不思議があり、『天地明察』(沖方丁)の中をさまよえば想像以上の壮大なドラマがあっ



て、飽くことのない流れが歴史上の人物の虚実を含めてビシバシ心に響いてくる。『海賊と呼ばれた男』(百田尚樹)の世界では、今まで知らずに興味も持たなかった史実を見つけ、自分のちっぽけさに驚くこともしばしばだ。それでも気にせず、興味のままだに相変わらず乱読の波間に飛び込んでいる。そして、たまに、誰か他の人が自分と同じ本を読んでいて、ちょっとした瞬間にその人と話題が噛み合ったりすると、それはまた別の楽しみ方なんだなと感心する。読書って面白い。本の扉を閉じたとき「よっしゃ、明日も頑張ろう。」って思う。そんな読み方を続けたいな。もちろん「なあなあ」でね。



( 英語科 宮崎裕之 )